五月心光寺定例聞法会のご案内

＊期　日　平成十五年五月十六日（金曜日）《＊毎月十六日》
＊時　間　十六日（昼席）午後一時三十分より　（夜席）午後七時より
＊会　場　（昼席）心光寺本堂　（夜席）心光寺庫裏
＊講　師　大石　法夫　先生（広島市在住）

心光寺からの便り

◇山々の命が一斉に芽吹き、私の中の命がそれに呼応して逝（ほとばし）りでるような、一年中で最も新鮮な季節の中にあります。このような新しい命の息吹（いぶき）に接すると、それだけで生きてあることの喜びが体に満ちてくるのを感じます。皆様もお元気でお過ごしのことと存じます。

◇さて、先月号の「心光寺からの便り」の終りの所で、大石先生が家内にくださったお便りの一節を紹介させていただきました。もう一度書かせていただきます。

「今日は、私は今から

道路の掃除にゆくつもりです。家内は今買物に出ました。家は静かです。明日は四月一日、法座の準備をします。

私はこうして、一刻々々が始まりです。一刻々々が終わりです。」

このお便りが届いたのは四月二日。それから何度も読み返しますが、何度読んでもこのお言葉には力を与えられます。

信心をいただくとは、「始まり」をいただくことなのでした。「始まり」をいただくとは、道が開かれるということです。歩みが与えられるということです。

私の思いはしばしば行き詰まります。そうすると道が先細りになって、やがて閉ざされてしまいます。もう歩むことができなくなります。善導大師が二河白道の譬えの中で教えてくださった「三定死」もこれだと思います。行くも死。帰るも死。止まるも死。このように一種として死を免れないという状況に立たされているのが「三定死」です。普通はそれで人生は終わりです。

ところが人間の考えでは人生も終わりという所が、念仏をいただけば、そこが「始まり」です。もうどこにも行き場がなくなった者にとって、そこが実は「始まり」だということは大きな救いです。

二河白道の譬えでいうと、

「我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を免れざれば、我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん。必ず度すべし」　（善導大師『観経疏』）

このように行者は、その三定死のただ中で決意するのです。

一種として死を免れないという状況は、それまでは「惶怖する（おそれおののく）ことまたいうべからず」の原因でした。ところが今は逆にそのことが「我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん」ということを決意せしめる原因になっています。

ところでここに使われている「寧く」という文字は、「安寧」という言葉から

も分かるように、心が安らかであることを表す文字です。手元の漢和辞典を引いてみますと、いくつかある意味の中に次のような意味が書かれていました。

「里帰り。結婚した女性が実家にはじめて帰って父母に会って安心すること」

これは実に見事な譬えです。家風のちがう他家に嫁いだ女性は、毎日が緊張の連続でしょう。その女性が結婚して始めて里帰りを許された。「帰心矢の如し」の譬えのとおり、喜んで実家へと急ぐ。そしてようやく懐かしい家へとたどり着いて父母の顔を見る。その時の安堵感はとても言葉で言い表せるものではないでしょう。「**寧く**」という字には、そのような深い安堵感を表す意味が含まれているというのです。

「一種として死を免れず」――そのことが、なぜそのような安らかさをもたらす原因になり得るのでしょうか。それは「一種として死を**免れざれば**、我**寧く**この道を尋ねて前に向こうて去かん」とあるように、「一種として死を免れない」からこそです。

つまりそこで今までの自分に死ぬのです。だからそこに自力一杯で生きてきた長年の心労から解放されて、心底の安堵感を与えられるのです。

そしてそこに「始まり」をたまわります。

今までの自分をいつまでも引きずっていては、始まりどころか行き詰まりしかありません。大石先生が書いておられるように、「一刻々々終わる」からこそ「一刻々々始まり」です。

状況自体が何か変わるわけではありません。ただ、今までの自分に死んで新しい自分をたまわる。そのことによって

その同じ三定死の状況が、自分の歩く道となります。どのような状況でも、念仏をいただけばそこが「始まり」となり、出発点となります。そこで誕生します。「ただいま誕生」です。

念仏こそが、念仏のみが、そのような「始まり」であり、誕生です。

◇天親菩薩の『願生偈』は

「世尊我一心　帰命尽十方無碍光如来　願生安楽国」

（世尊よ、私は一心に、いかなるものも妨げることのない光の如来に帰命し、命の古里であるその如来の国に帰らんと立ち上がります）

という表白のお言葉で始まります。親鸞聖人はこのお言葉に深い感動をもって出会われました。それは『教行信証』の「信の巻」をお書きになる時、大事な節目の所に来ると、

「この故に論主（天親菩薩のこと）**建に我一心と言**えるなり」

と繰りかえし述べておられることからも分かります。

ここで親鸞聖人は「はじめに」という言葉に漢字を当てる際、「**建**」という字を使っておられます。この字は筆の意を表す「・」と、伸びる意を表す「・」から成り立っています。すなわち伸びやかに立った筆の穂先が墨を含んで、今白い紙の上に打ち込まれようとしている。その瞬間をとらえて「はじめ」という意味を表わしているのがこの「建」という字です。

親鸞聖人がわざわざこの字を使われたところに、白紙にこれから運筆を始めるように、今から新しく始まる。これまでの自分に死んで、今全く新しく生まれ出る。出直す。そういう意味をこめておられることを感じます。

それから「**我一心**」についてですが、これは通常は「我は一心に」と読むところです。しかし親鸞聖人は「我」と「一心」を切り離しません。いつも「**我一心**」と、両者を一つのものとしていただかれます。これは「我」といっても「一心」の他にはないことを表します。生まれて以来の我を一心にするのではないということです。生まれて以来の我こそは飽くことのない流転の原因です。その我に

死んで、如来に帰命する「一心」を新しい我としていただく。一心帰命の我をたまわる。そういうことをこの「**我一心**」は表しています。

つまり天親菩薩はこの「**我一心**」によって、今までの自分に死んで全く新たな自分に生まれ変わられたのです。八方塞がりの状況のただ中に「始まり」をいただかれたのです。そのような新生の喜びを「**我一心**」の表白において叫んでおられます。その天親菩薩のお心に親鸞聖人は出会われたのです。先に引用した言葉には、その親鸞聖人の感動が表れているのを感じます。

そして大石先生が「私はこうして一刻々々が始まりです」と言われるとき、それは天親菩薩が「**我一心**」と表白されたのと全く同じ内容の命が、今大石先生の中に噴き出していることを感じます。

◇以上のことから、「**始まり**」も「**建**」も「**我一心**」も、実は皆同じ内容の命を表そうとしているに違いない。そのように私はいただいています。その命は親鸞聖人が、

「帰命とは本願招喚の**勅命**なり」

と述べておられるように理屈を超えた根源的な命令。汝の因縁の全てを引き受けて生きよという如来の深い呼びかけ。そういう如来の**勅命**（無条件の促し）としての命ではないかと思います。

そしてそれが南無阿弥陀仏の内容です。南無阿弥陀仏は単なる呪文や符牒ではありません。私の命の根源からの叫び。命の噴出。命の命令です。

◇それからもうひとつ付け加えたいことがあります。それは親鸞聖人が「この故に論主建に我一心と**言えり**」（是故論主建言我一心）と述べられる時の「**言**」という文字についてです。

実は「いう」という言葉に対応する漢字は、「言う」と「曰う」と「云う」の三つがあります。親鸞聖人はこの三つの文字を厳密に使い分けておられます。

親鸞聖人が「**言**」という字を使われる時は、そこに「仏のおおせ」という意味をみられる時です。

従って「この故に論主建に我一心と**言えり**」という表現には、天親菩薩の「我一心」の表白は単なる人間の言葉ではない。これは仏が「我一心」と名乗り出られたお言葉なのだという感動がこめられていることが分かります。

「この故に論主建に我一心と言えり」

何といい言葉でしょう。『教行信証』の「信の巻」には全部で四回この言葉が出てきます。親鸞聖人の強い感動が伝わってきます。

今まで述べてきたように、それは「始まり」をいただくという感動です。それがたとえどのような状況であろうとも、そこに「始まり」をただく。そこを出発点といただいて、今までの自分に死んで、白紙になって、立ち上がっていく。新生。誕生。

「そうだったのか。だから天親菩薩は建に《我一心》と表白されたのか！」そのような深い喜びが伝わってきます。それはちょうど今の季節のような命そのものの噴出の営みと出所は全く同一のものでしょう。

大石先生が「私はこうして、一刻々々が始まりです」と言われて公園の掃除に出かけていかれるのも、全く同一の命の勅命に立ち上がっていかれる姿です。そういうことを私は折にふれては感じさせていただいて、元気を与えられてきました。

◇ここでかつて大石先生がＮＨＫラジオでお話しされた際のお言葉の一部を引用させていただきます。

「後天的な知識はめげて（壊れて）いきます。ところが南無阿弥陀仏は、無量寿、永久の命ですから『オギャー』と同じなんですね。オギャーというのは人間の声であってね、同時に生命力の声なんです。人間の言葉は意識

を通して話しておりますが、オギャーというのは、あれは天地の中に流れている偉大なものが出た声でしょう。日本人の声じゃないんです。アメリカ人の声でもありません。黒人、白人の声というものでもありません。まあ人間の生命力の声なんです。あれと同じものなんです、念仏はね。人間の意思を通さない、六感を通さない如来の声なんです。」　（平成六年七月二十日～二十二日ＮＨＫラジオ深夜便放送「生きていてよかった」二十九頁）

ここで大石先生が語ってくださっている天地を流れる生命力の産声（うぶごえ）こそ、仏のおおせとしての「我一心（がいっしん）」です。この「我一心（がいっしん）」をたまわる時、いつでもどんな状況においても、そこに「始まり」をいただくのです。そのことを大石先生のお便りは教えてくださいます。

◇実は大石先生からこのお便りをいただく前に、私の家庭で次のようなことがありました。それは三月三十一日のことです。午前十時頃、職場にいる私の携帯電話に着信の信号が入りました。家内からでした。何だろうと思って電話を取りました。すると、

「今から始まるんだとようやく気付いた。私は今までの延長と思っていたので、過去の恨（うら）みつらみを引きずってそれで悶々としていた。だけど大石先生は継職（けいしょく）法要の翌日の法話で、これから継職（けいしょく）の歩みが始まると言われていたことに気付いた。これからが始まり。これからがスタートなんだ。今そのことに気付いた。そのことを伝えたかった。」

それだけを私に伝えるための電話でした。

実は三月十六日に継職（けいしょく）法要が終わって以来、家内はずっと気持ちが沈んでいたのです。そのような経緯を経て、三月三十一日にこのような電話を私にくれたわけです。

その日家に帰ると、

「すごいやろ」と家内が言います。

「何が？」
「始まりと気付いたこと」
「うん」と私が生返事をすると、
「私にとってはすごいことなんよ。今までの延長だとしか思っていなかった。だから愚痴から解放されなかった。でも今までの延長ではない。これからが始まりなんだと気が付いた。
〇〇さんの愚痴。三十年も前の恨(うら)みつらみを長々と聞いたことは、私にとっては非常にいいことだった。私もいっしょだなと思ってぞっとした。だからどうしたらそれから解放されるのだろうかということは私の大問題だった。そしてやっとわかった。解放されないのは過去をいつまでも引きずっているからなんよ。だからどこまで行っても恨(うら)みつらみの延長。でも今から始まりと気付いたら、そこから出発していけるんやね」
私はこの話を聞きながら、かつての師、故吉田龍象(りゅうしょう)先生がよく「終わりをもって始めとする」と言っておられたことを思い出していました。
そしてその二日後に大石先生から前述のお便りを受け取ったわけです。
このような経緯があった直後だけに、よけい大石先生のお言葉が私に強く響いてくださったのでした。

◇最後に、話は変わりますが、家で飼っている猫から教えられたことを書いて終わりにします。

数日前から飼い猫のミャーちゃんが衰弱してきました。十五歳の猫ですから、人間でいえばかなりの高齢者になるはずです。十日ほど前から急に正常に歩くことができなくなって、横たわったままの状態になりました。それでも二、三日前までは、時折立ち上がってよたよた歩く気配もありました。ところが四月三日の昼ごろから、もう全く立ち上がることもできなくなりました。うつろな目をして、力なく横たわっているばかりです。家内は顔を近づけ、時折「ミャーちゃん」と呼びかけながら、ずっと付きっ切りです。

この猫は四匹いた兄弟の中で、体は一番小さいけれども一番敏捷（びんしょう）でした。よくねずみを捕（と）ってきました。また人間の心を読み取るようなところがあり、少々のことはがまんするおとなしい猫でした。ところが今はあの敏捷（びんしょう）さの面影はどこにもなく、力なく横たわっているばかりです。

家内は「ミャーちゃん」と呼びかけながら、体をなでては、

「ミャーちゃん、有難う。よく子供をみてくれたね。ミャーちゃんは身軽かったね。よくねずみを捕（と）ってきたね。がまん強かったね。レイちゃん（六年前に行方不明になったミャーちゃんの兄弟の猫）によろしくね。」

と声をかけています。猫といえども、子供の成長に寄り添うようにして一緒に生活してきたので、家族の一員を失うような悲しみがあるのです。

私はその家内の声を聞き、そして力なく横たわって最期の時を迎えつつあるミャーちゃんを見ながら思いました。

「私もいつかあのようにして命を終えていく。今ミャーちゃんはそれを私に見せてくれている。十七年前に亡くなった母も、五年前に命を終えたミミちゃん（ミャーちゃんの母親の猫）も、三年前に命を終えた鶏も、先日命を終えた金魚も、みな等しく命あるものの最期の姿を私にみせてくれる仏様である。

ミャーちゃんは今仏様からいただいた命を仏様にお返ししようとしている。それが命の本当の姿だということを身をもって私に教えてくれている。私も今は元気だが、いつかはミャーちゃんのように動けなくなる時がくる。その時私も仏様から預かった命をお返しするのだ。それまでは預かったこの命を如来様のために使わせていただこう。」

そういうことをしみじみ思いました。そういうことを身をもって教えてくれたミャーちゃんは、間違いなく諸仏の一人なのでした。

「如来様に使ってもらっては、そのことを謝したてまつる。そのような生活を送らせてもらいなさい」

そのような大石先生の教えに立ち返ることを身をもって教えてくれる諸仏の一人なのでした。

南無阿弥陀仏

平成十五年五月十一日

宮岳文隆拝

摂取山心光寺

第四回念仏同朋研修会のご案内

全国各地から参加される方々と交流し、その生き様から多くのことを学ぶことができる貴重な機会です。ぜひご参加くださいますようご案内いたします。一日だけのご参加でもかまいません。

期　日　平成十五年六月十四日（土曜日）～十六日（月曜日）　二泊三日

時　間　六月十四日午後一時三十分～十六日正午まで（昼食後解散）

会　場　（〒八七九-五一一三）大分県大分郡湯布院町川西下津々良　心光寺

講　師　大石　法夫先生

参加費　御志（どうかご無理のない額にてお願いします）

〔参加申し込み方法〕左の申込書に記入して、表の部分を切り取り、葉書に貼って心光寺宛に郵送してください。なお、心光寺ご門信徒の方々につきましては参加申し込みなしでご出席いただいてかまいません。ではお待ちしています。

氏名	住所	電話	食事の予定	宿泊
			十四日夕食・十五日（朝食・昼食・夕食）十六日（朝食・昼食）	十四日有・無 十五日有・無
			十四日夕食・十五日（朝食・昼食・夕食）十六日（朝食・昼食）	十四日有・無 十五日有・無
			十四日夕食・十五日（朝食・昼食・夕食）十六日（朝食・昼食）	十四日有・無 十五日有・無
			十四日夕食・十五日（朝食・昼食・夕食）十六日（朝食・昼食）	十四日有・無 十五日有・無